

シューベルト：交響曲第7(8)番 短調 D.759「未完成」(約25分)

Franz Schubert: Symphony No.7 (8) in B minor, D.759, "Unfinished"

第1楽章 アレグロ・モデラート

Allegro moderato

第2楽章 アンダンテ・コン・モート

Andante con moto

ドヴォルザーク：交響曲第9番 短調 op.95「新世界より」(約40分)

Antonín Dvořák: Symphony No.9 in E minor, op.95, "From the New World"

第1楽章 アダージョー - アレグロ・モルト

Adagio - Allegro molto

第2楽章 ラルゴ

Largo

第3楽章 スケルツォ：モルト・ヴィヴァーチェ

Scherzo : Molto vivace

第4楽章 アレグロ・コン・フォーコ

Allegro con fuoco

【指揮】ユベール・スダーン

Hubert Soudant, Conductor

【管弦楽】兵庫芸術文化センター管弦楽団

Hyogo Performing Arts Center Orchestra

※演奏時間は目安です。前後する可能性がありますので、予めご了承ください。
※本公演に休憩はございません。

※この公演の録音・録画・撮影および、そのための機材の会場内への持ち込みは固く禁じられています。
※音や警報音の鳴る機器(補聴器、アラーム付時計等)をお持ちの方は、上演中音が鳴らないようご注意ください。
※客席内では携帯電話は使用できませんので、電源をお切りください。
※演奏中の会話、客席内での飲食はご遠慮ください。

「名曲」には「名曲」たる所以があります。本日のプログラムにもそうした2曲の名曲が並びました。何度も聴いて知ったつもりになっていても、やはり聴くたびに新たな発見があるのが「名曲」なのです。

シューベルト：交響曲第7(8)番 短調 D.759「未完成」

Franz Schubert: Symphony No.7 (8) in B minor, D.759, "Unfinished"

愛称どおりに「未完成」のまま放っておかれました。未完の作品でこの曲ほどに、繰り返し演奏されて「名曲」となった作品も珍しいと言えます。

ウィーンに生まれ、ウィーンで活躍したフランツ・シューベルト(1797-1828)は600曲もの歌曲を書いた「歌曲王」として知られますが、器楽曲でも実にチャーミングなメロディを綴りました。交響曲にも熱心に取り組みます。《第1番》から《第6番》の6曲の交響曲は1813年秋から1818年春までの足掛け6年の間に、ほぼ年に1作のペースで順調に書き上げられました。

1821年に取り組まれた交響曲が、スケッチのままで残されました(D.729)。これを指揮者のフェリックス・ワインガルトナーが編曲して《交響曲第7番》としたために、「未完成交響曲」を「第8番」、また1826年に書き上げられた「グレート交響曲」を「第9番」とする番号付けが使われていました。混乱が生じるのですが、今日では《D.729》の番号は外された上で、《第7番「未完成」》、《第8番「グレート」》とすることが多くなっています。この2曲はシューベルトの生前に演奏されることはありませんでした。

この「未完成」の作品は、シュタイアーマルク音楽協会の会長を務めた、アンゼルス・ヒュッテンブレンナーの机の中から、シューベルトの死後32年も経った1860年になってようやく発見されました。そのことから、「未完成交響曲」は、1822年(25歳)の秋にこの協会の名誉会員にシューベルトが推挙されたことの返礼であったという説が唱えられたのですが、どうも確証には

乏しいようです。シュタイアーマルクは地名で、この地域の現在の州都はグラーツです。作曲中にピアノ曲の作曲依頼が舞い込んで、交響曲の作曲が中断したとの説もありますが、こちらも確かなことはわかりません。なぜこの作品が生まれたのか、そして、なぜ途中で放置されたのかが、一向にはっきりとしないわけです。

《第6番》を書いてからのシューベルトの交響曲の取り組みには変化が生じました。試行錯誤の段階と言える3作の未完のままになった取り組みが確認されていますが、その後に手がけた「未完成交響曲」には、これまでの交響曲とは一線を画す、えぐり取るようなと表現できる響きが連なっていて、やはりそこには「死」というものが見え隠れします。その後、たまたま時期が重なっただけとも言えますが、1822年末、もしくは1823年初めにシューベルトは梅毒にかかり、1828年の死に至る道程が始まった時期にも当たります。

通例の交響曲の形で、4楽章での構成を目していたと思われるのですが、この作品は最初の2楽章だけが書き上げられていて、第3楽章はピアノスケッチを終えた後に、冒頭の20小節だけオーケストレーションに手がつけられています。2楽章構成の作品として受容されていて、一般にこの楽章は演奏されません。〈第1楽章〉はロマンティックでありながら、抒情性に満ちたもの。それでいて、所々にはデモーニッシュ(悪魔的)な響きが渦巻いています。〈第2楽章〉は夢見るようにメランコリックな音楽。やはり音楽はここで完結しているように感じさせられます。

楽器編成

フルート2、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2、ホルン2、
トランペット2、トロンボーン2、バス・トロンボーン、
ティンパニ、弦楽5部

ドヴォルザーク：交響曲第9番 ホ短調 op.95「新世界より」

Antonín Dvořák: Symphony No.9 in E minor, op.95, "From the New World"

21世紀の今はウィーンから列車に乗れば、チェコのプラハまでは4時間ほどで到着します。ドヴォルザークが生きた時代、さらにベートーヴェンの時代まで遡れば、そういう訳にはいかないのですが、隣国であり、文化の共通項を持った地域であることは、今も昔も変わりません。

アントニン・ドヴォルザーク(1841-1904)は19世紀を代表するチェコの国民的作曲家です。そのドヴォルザークが「新世界＝アメリカ」から書いた交響曲が、この《交響曲 第9番 ホ短調「新世界より」》なのです。彼の最後の交響曲になりました。1892年9月にドヴォルザークはアメリカへと渡ります。何度も懇願されていたニューヨーク・ナショナル音楽院の院長に就くためでした。作品は到着後4ヶ月ほど経った1893年(52歳)1月に着手し、同年5月には書き上げられます。同じ年の12月15日と16日にニューヨークのカーネギー・ホールでアントン・ザイドル指揮のニューヨーク・フィルハーモニックによって初演が行われました。「新世界より」というのは、初演時から付けられていた題名です。

シューベルトの場合と事情は違いますが、ドヴォルザークの交響曲も今と昔で番号が変わっているのです。この「新世界交響曲」は《交響曲第5番》とされていました。ドヴォルザークの生前は、今《第1番》から《第4番》とされる初期交響曲は出版されていなかったために、こうした番号付けで呼ばれていました。

実はこの「新世界交響曲」はドヴォルザーク自身が楽譜の出版に際して校訂作業に携わらずに、恩人であり、敬愛するブラームスが校訂にあたったという事情があり、様々な楽譜上の問題が未だに解決されていません。指揮者によって処理の方法は様々ですが、これは何が正しくて何が間違っているというのではなく、受容の過程も含めて作品の形成が行われたというひとつ

の例にもなっています。

4つの楽章で構成されていて、全楽章に共通したメロディが用いられる循環主題が示されています。〈第1楽章〉で霧の中から浮かび上がる序奏の後に、テンポが速められてホルンがユニゾンで吹く主題(ミーソシミー、ソーミドシミー)が循環主題となります。雄渾な音楽が連なりました。〈第2楽章〉ではイングリッシュ・ホルンが奏でる郷愁に満ちたメロディが耳に残ります。ドヴォルザークはこの楽章について「アメリカ先住民の葬儀」と説明しました。〈第3楽章〉はボヘミアの民族舞踊に着想を得た、躍動感に満ちたもの。〈第4楽章〉では冒頭の音の動きが、蒸気機関車が発車する様子に聞こえます。ドヴォルザークはかなり熱心な鉄道マニアでした。ダイナミックなフィナーレの最後に、和音が管楽器で長く引きずられる幕引きがユニークです。

楽器編成

フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2(イングリッシュ・ホルン持替)、
クラリネット2、バスーン2、ホルン4、トランペット2、
トロンボーン2、バス・トロンボーン、テューバ、ティンパニ、
シンバル、トライアングル、弦楽5部

新型コロナウイルス感染防止に関するお願いとお知らせ

- 必ず指定されたお席でご鑑賞ください。
- ご鑑賞中も、常にマスクをご着用ください。(マウスシールド不可)
- ブラボーなどの声援や、大きな声での会話はお控えください。
- 途中で退出されますと、ご自身のお席へお戻りいただけない場合があります。
- 終演時は、分散してのご退場にご協力ください。
- 客席内は、強制換気システムにより常に外気との入れ替えを行っております。

当センターウェブサイトより、
アンケートへのご協力をお願いします。

右記QRコードを読み取って公演カレンダーへ
アクセスしてください。(公演翌日から12月21日まで)



「兵庫県コロナ追跡システム」
をぜひご利用ください。館内
掲示のポスターよりQRコード
を読み取ってご登録ください。